



みんなが右を向いていたら、一度は左を向いてみよう

校長 三村 孝志

平成最後の夏休みはどうでしたか。充実していたでしょうか。8月28日から、2学期が始まりました。どの学期も忙しいわけですが、2学期は体育祭、音楽祭があり、また、定期テストも2回あります。とても忙しい学期です。健康に留意し、楽しい学期にしてください。

少し前のこととなりますが、大学のアメリカンフットボールにかかわる問題が報道されたことがあります。また、アマチュアボクシングにかかわる問題が報道されたこともありました。テレビ局を中心として、様々な内容が報道されました。しかし、監督や会長を務めていた人物の評価はほぼ定まってしまい、その評価に合致するような映像や写真が選択されていると感じられたことでした。監督として、会長としての手腕はどうだったのか、なぜ、その人物が、監督となったのか、会長となったのかなどの疑問に答える報道は、あまりなかった（あったとしても非常に少なかった）と思われる。普段は、人権に配慮していると思われるのに、一度評価が定まってしまうと、「人権に対する配慮が足りないのではないか」という、人物の人格にかかわる報道もなされるようになりました。

歌人で細胞生物学者の永田和宏さんは次のように述べています。

自戒を込めて私がいつも学生たちに言っている言葉に、「みんなが右を向いていたら、一度は左を向いてみよう」というものがある。言うのは簡単だが、これが実はなかなかむずかしい。

確かに永田さんが言うように、私たちは「とても弱い存在」であり、「マスコミやメディアの言説に動かされやすい」と思います。様々なできごとが報道されていますが、どうもどのテレビ局も、似たような内容で、自前で取材した形跡はあまりみられません。みんな右を向いているように感じます。

人物に対する評価も、ある方向に評価が定まりはじめると、次から次へとどうでもいような報道がなされはじめます。コメンテーターと称する方々のコメントも、その評価の範囲内のものとなっていき、違う意見を述べる雰囲気なくなってきました。このような社会は健全な社会ではありません。

永田さんは言います。

みんなが正しいと言いはじめたら、一回はそれを疑ってみること。一度だけでいいから左を見てみる。たいていは自分の考えや判断が間違っていることの方が多い。それでいいのである。とりあえず習慣として、一度はみんなが向こうとしている方向とは反対を見てみる。それが習慣となるまで、意識しておきたい。

考えるということで、大事なことは疑うということです。どんなに学識がある人が言おうとも、それだけで言っていることが正しいことにはなりません。間違っていることは、誰が言っても間違っているとも考えられます。権威は正しさの根拠になりません。

インターネットの世界にあふれている情報を、疑うことなく簡単に信じてしまう人が少なくないようです。人間は疑うことよりも、むしろ信じたがってしまう存在なのかもしれません。その方が楽だからです。ですが、それは思考停止でしかないとも言えます。疑うこと、疑問をもつことを意識的にしてみると、世の中、結構いい加減な言説が蔓延していることがわかってきます。

学校で解いている問題だけではなく、現在起こっているできごとについて「本当か」「なぜか」などの疑問をもち、自分なりに考えてみるのが大切だと思います。

学校で解いている問題は、必ず答えがあり、それは客観的なものであるという前提に立っています。社会に出ると、正解を誰かが教えてくれる、あるいは、問いに対する答えを誰かが知っているということはあまりありません。自分の身の回りを見つめ、考え抜き、自分で答えを出さないのです。